

## 学生が主体的に取り組む The Nursing College Seminar

—1995年から2005年の歩み—

白神 佐知子<sup>1)</sup>\*・上山 和子<sup>1)</sup>・岡 宏美<sup>1)</sup>

1) 看護学科

(2006年11月7日受理)

新見公立短期大学看護学科では、毎年1年次生の戴帽式の代わりとしてNursing College Seminar (以下、NCSとする) を設けている。これは、看護学生自身が関心をもっているテーマで講演・シンポジウムなどを開き、看護について考えを深めることを目的として1995年より導入しており、学生が主体的に学習していくきっかけ作りとしている。NCSを通して、参加学生は看護の深まりや他職種の連携を学んでおり、また今後の学習への動機付けや進路選択にも役立っていると考えられる。NCSは、運営自体を学生が主体的に行うことにより、テーマに関する知識の学習だけでなく、協調性を身につけたり、講師との交渉や接待など対外的な社会性を身につける機会にもなり、総合的な学習の効果が高いと考える。また、地域の看護職とも連携し共同開催の形式をとっており、実習関係者にとって研修の場としても意義高いと考える。

(キーワード) NCS、主体性、看護観

### はじめに

新見公立短期大学看護学科では、開学以来1年次生に看護職を目指すための自覚を促す目的として戴帽式を行なってきた。看護基礎教育課程においては、自ら思考し、主体的に対応・判断・実践できる能力をもった看護職の育成をめざす<sup>1)</sup>意味で、筆者らは看護を学習する上で儀式の大切さを継承していくとともに一方で、看護を主体的に学習する機会として、学科行事の中での教育の方法の検討をしてきた。こうした経緯より毎年、1年次生の戴帽式の代わりとして、Nursing College Seminar (以下、NCSとする) を1995年より導入してきた。このセミナーは看護学生自身が関心をもっているテーマで講演・シンポジウムなどを開き、看護について考えを深めることや将来の医療従事者としての動機付けを目的としている。そ

して開催時期は、1年次生の基礎看護学実習前の11月で、学生が主体的に学習していけるきっかけ作りとしている。当初の対象は、1年次生が中心であったがその後、全学年を対象として、地域の看護職とも連携し共同開催の形式をとっている。2005年11月で11回目が終了し、年々、学生をはじめ地域の専門職からも高い評価を得ており、NCSの意義の大きさを感じている。

そこで今回、看護学科の学生が主体的に取り組むNCSについて紹介し、11年の歩みを報告する。

### 1. NCSの目的

看護を学ぶ学生と教員、臨床指導者、地域の看護職とともに、看護について幅広くかつ深く考える機会とし、座学では学べない学習を期待し、また学生の看護実践への心構えを培うことを目的と

\*連絡先：白神佐知子 看護学科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

している。

## 2. Nursing College Seminarの運営形態

NCSの運営形態は大きくわけて、学生の主体的運営、教員による支援、実習病院との連携、地域の看護職との連携の4つに分類される。(図1)

### 1) 学生の主体的運営

毎年年度当初にNCSの委員を選出し、約半年間に、十数回の検討会を重ねて開催を迎えている。NCS委員の構成は、当初2年次生と教員3名との構成であったが、1年次生の看護を深めることを目的としたため、その後1・2年次生中心の構成メンバーおよび教員3名に変更した。

翌年には構成メンバーの変更を行うが、1年次に委員を体験した学生が、2年次にも繰り返し体験することにより、主体的に行う企画、運営の仕方を次の学年に伝え、取り組み方がスムーズになる効果が見られるようになった。また、NCSの運営は委員だけの意見ではなく、テーマの決定には、アンケートを実施し、学生の意向を反映するようにしている。そのため、クラスのメンバーも間接的であるが、当初より運営に参加する仕組みとしている。

またテーマが決定すれば、テーマ内容に関して学生間で事前学習を行う形式を取っており、その内容に応じた分担をそれぞれ決めて、基礎的知識を踏まえた資料を準備し、冊子にして事前学習を行いやすいようにしている。1年次生は、2年次生

からNCSの内容を解釈する支援を受けており、また、2年次生は、1年次生に運営方法を説明することで、より学習内容を理解していけると考える。これらの取り組みを通して学生同士の交流や連携が深まっていくと思われる。講師、あるいはシンポジストの依頼はテーマの内容で決定し、交渉や依頼文は教員のサポートの下学生が取り組んでいる。講師やシンポジストの生の声を聞くことで学生は、現場での臨場感を感じたり、より看護観が深められるといえる。

### 2) 教員の支援体制

教員は、講師との対応、地域・実習病院との連携、事前学習への支援の役割を3名で分担している。そして構成員全体の会議だけでなく、それぞれの担当委員の学生へ助言や指導をその都度行うなど支援体制をとっている。その際、教員は学生同士がお互いの意見が出しやすく、尊重、助け合いながら意見交換ができるよう環境作りに心がけている。またNCS当日では、司会、進行等の役割を担当している学生の後ろに待機し、学生の相談を受けたり、適宜助言を行ない、全体調整をしている。

### 3) 実習病院との連携

従来の戴帽式の代わりとして、看護職への自覚をもつことを目的としたNCSは、実習病院の看護職にとって学校で学生の学習に参加してもらう機会でもあり、意義は高いと考える。本学は、大学と実習場が離れている環境にあり、実習関係者に学生の学習状況を知ってもらう良い機会とな

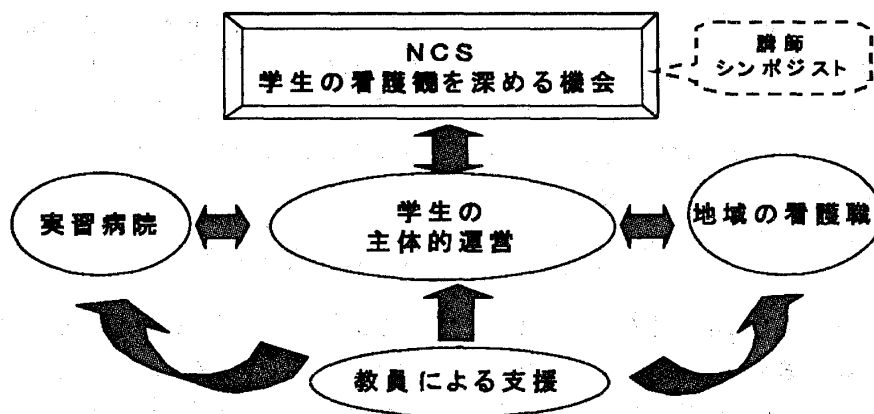


図1 NCSの運営形態

表1 援助技術論授業時間

4月	5月	6月	7月
<ul style="list-style-type: none"> <li>・NCS委員選出</li> <li>・運営方法の検討</li> <li>・アンケート実施</li> <li>・テーマの決定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・会の形式決定</li> <li>・講師の交渉</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講師の決定</li> <li>・事前学習の準備</li> <li>・講師依頼文作成</li> <li>・役割分担決定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リーフレット作成</li> <li>・事前学習の資料作成</li> <li>・施設案内文作成</li> </ul>
8月	9月	10月	11月
<ul style="list-style-type: none"> <li>・各委員自己学習</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パンフレット作成</li> <li>・実習病院及び地域看護職への案内</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前学習冊子の仕上げ</li> <li>・事前学習の説明</li> <li>・講師への最終確認</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リハーサル</li> <li>・実施</li> <li>・反省会</li> </ul>

る。また、学生にとっても実習関係者が参加していることにより、同じ場で看護が深められる親近感を感じ、さらに実習に取り組む動機付けになっている。

#### 4) 地域看護職との連携

NCSは日本看護協会の地域支部の協賛もあり、地域に学生の学習状況を知ってもらい、看護職との連携の機会になる。また、地域の看護職はテーマを通してよりいっそう看護を深める学習の場となるといえる。また講演やシンポジウムでの地域の看護職の質疑応答の場面を通して、学生は実際の現場の看護の声を聞くことで、より実践的な学習をする機会ともなり得る。

### 3. NCSの実際の流れ

4月当初、各1、2年生のクラスからNCS委員を6名ずつ選出したのち、教員共に委員会を開き、以後月に1、2回のペースで運営について話し合っている。委員会では、司会や書記はすべて学生が中心になって行い、2年次生はなるべく1年次生の意見を聞き、サポートしている。4月の時点で各クラスにテーマの希望アンケート調査を実施し、結果を委員会で検討後テーマを決定する。テーマが決まり次第、講師の候補により交渉を行い、6月には講師の決定する。その後講師との調整を

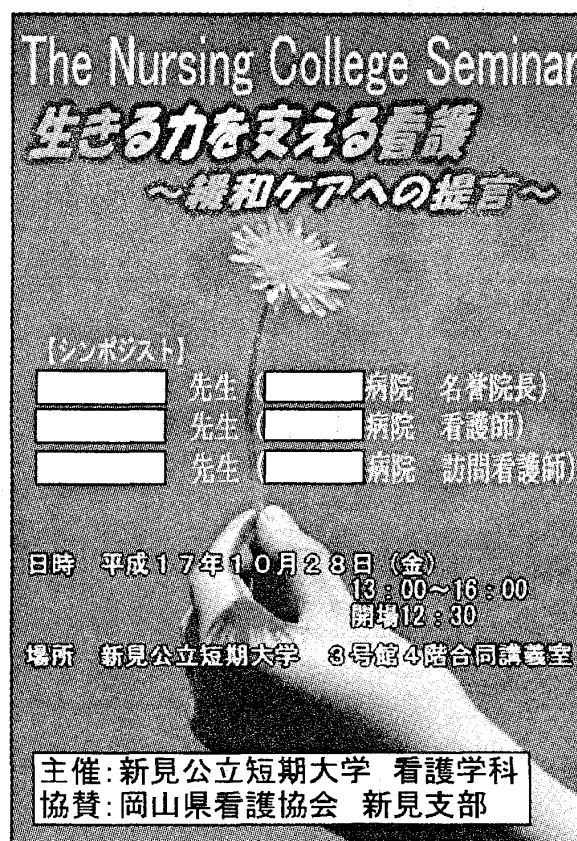


図2 2005年度NCSリーフレット

教員もサポートしながら行う。また全員で事前学習の準備に取りかかり、その際、教員も助言する形で進めている。

10月後期に入ってから、参加者への案内状の

発送やリーフレット、パンフレット、事前学習資料の仕上げに入り、講師が必要な機材や資料等の最終確認を行っている。開催当日には、進行がスムーズになるように、役割別にタイムスケジュールを組んでいる。(表1)(図2)(図3)(図4)

#### 4. 歴代のテーマ

テーマは先にも述べたが、各クラスでアンケート調査を行い、学生の希望の多かった内容を参考に最終的には委員会が決定する。これまでのテーマを見ると、生や命についての内容が多く、生命や死について関心が高いことがうかがえる。またNCSの最近の形式の傾向としては、看護専門職を招いたシンポジウムが多くなっている。(表2)

#### 5. 参加した学生の学び

NCSの終了時に参加者の学生には学べたことや感想を書いてもらっている。学びの内容としては4つの分類に抽出された。「看護観が深まり確かなものになる」「もっと看護について考えてい

きたい」といった看護の深まり、「海外医療を知ることができた」「今後の学習に役立つ」など学習への動機付け、「保健師の仕事に興味があった」「今後の進路に大いに役立った」など進路に関すること、「多くの職種が連携して生命を見守っている」といった他職種との連携などのキーワードが見出され、NCSの狙いどおりの学びが得られていた。(表3)

NCS委員を担当した学生の学びは「短期間の準備で大変だったが、みんなで協力したことがよかった」「学生の意見を出して構成したのでいろいろ勉強になった」「シンポジウムの運営、司会をして、大学生という気分と誇りがもてた」「1・2年生でグループワークを行うことにより、学生間の関係を持つことができた」「受付では挨拶ができた」「会場係りとして指示を出すのが難しかった」「司会者としてやりがいを感じた」などで、自主的に自分たちで役割を持ち運営することの難しさを学ぶと同時に、充実感や達成感を感じていた。

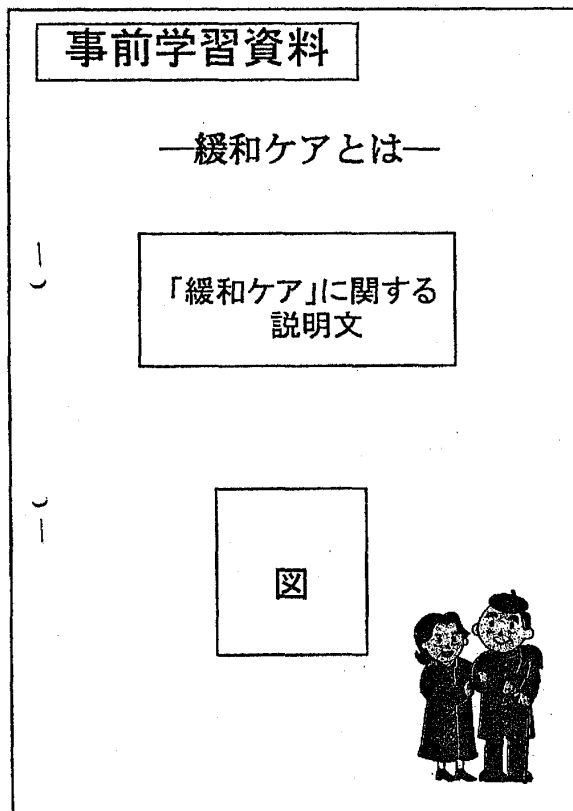


図3 2005年度NCS事前学習資料



図4 2005年度NCSパンフレット

表2 NCS歴代テーマ

開催年度	NCSテーマ	講師
1995年 (第1回)	「新見から世界へ」(これからの看護)	講師: 大学教授1名
1996年 (第2回)	「看護のartをめざして」(QOL)	講師: 大学教授1名
		シンポジスト: 看護教員1名、看護師1名、家族1名
1997年 (第3回)	「ともに明日を輝かせて」(生と死)	講師: 大学教授1名
1998年 (第4回)	「いま、私にできること」(災害時の生活援助)	講師: 大学教授1名
		シンポジスト: 看護師2名、大学院生1名
1999年 (第5回)	「未来に向けてステップ～私たちのチャレンジ～」(専門看護師の役割とその可能性)	講師: 専門看護師1名、看護師2名
2000年 (第6回)	「心のケア」(看護臨床におけるケアを实らせるコミュニケーション)	講師: 大学教授1名
2001年 (第7回)	「命との対話—ターミナルケアにおける患者理解(患者の接し方)」	講師: 大学教授1名
		シンポジスト: 看護師2名、家族1名
2002年 (第8回)	「新たな医療の世界～オーストラリアの医療事情～」	講師: 海外の看護師1名
2003年 (第9回)	「納得のいく終末期を迎えるために～家族と生きる～」	シンポジスト: 看護師3名、家族1名
2004年 (第10回)	「命を看守り、育む看護職～生命の誕生、そして成長を支える～」	シンポジスト: 助産師1名、保健師1名、看護師1名
2005年 (第11回)	「生きる力を支える看護～緩和ケアへの提言～」	シンポジスト: 医師1名、看護師1名、訪問看護師1名

## 6. NCSの成果

年1回のNCSの取り組みは、4月の年度当初から11月までの8ヶ月の時間を要するため、NCS委員の学生にとって精神的負担も大きいと思われるが、学年を超えた交流の場ともなり修学生活の充実にもつながっていると見える。そして学生の学びからも自分たちの手で成し遂げた達成感が得られていると考える。まさに学生同士が相互に知恵を出し合い、助け合いながら学習を進めていける<sup>2)</sup>教育内容とも見える。NCSに参加した学生は、看護の深まりや今後の学習への動機付け、進路への役立ち、他職種の連携を学んでいた。また、地域の看護職とも連携し共同開催の形式をとって

いることより、実習関係者にとって研修の場としても意義高いと考える。

NCSは、運営自体を学生が主体的に行うことにより、テーマに関する知識の学習だけでなく、協調性を身につけたり、講師との交渉や接待など対外的な社会性を身につける機会にもなり、総合的な学習の効果が高いと考える。

### 引用文献

- 1) 吉田喜久代：学生が主体的に学ぶ授業をするために教師は何を準備するか、看護教育、(42) 4、264-269、2001
- 2) 前掲書

表3 NCS学生の学び

年度	学びの内容	
平成13年度	A1	・NCS参加によりこれからの自分の看護像が大きく膨らむきっかけになった。
	A1	・看護師としてまた一人の人間として何が出来るかを今回のNCSで改めて考えることができた。
	A1	・戴帽式にあこがれていたが、より看護について深く考えることができる機会になった。
	A1	・自分の看護観をより深く確かなものになったと思う。
	A1	・臨床で働く人の生の声が聞けてよかった。
	A1	・死の直前、患者が何を考え、どのようなケアを求めているのか考えさせられた。
	A1	・実習をしてきた自分がどうであったかを考え、自分がしてきた看護は良かったのだと少し自信がもてた。
	A1	・今まで関わってきた患者さんひとりひとりのことを思い出し、自分のかかわりを振りかえることができた。
	A2	・実習に出るにあたり簡単な気持ちではいけない、本当に真剣に取り組まなければならない看護なんだと実感した。
	B	・今回のNCSは看護師になりたいと思う自分を応援してくれた。
B	・患者の自己実現の手助けができる看護師になりたいと思った。	
B	・患者や家族のそばにいて一緒に喜び、一緒に泣ける患者さんの命と向き合っていけるような看護師になりたいと思った。	
平成14年度	A1	・日本ももっとオーストラリアの医療を見習い、患者のための医療を確立していくべきで、この話をばねにもっと看護について考えていきたい。
	A1	・オーストラリアの遠隔地医療にIT技術が発達していることに感動した。
	A1	・実習先の病院という一部の医療しか見ることができていなかったが、今回の話を聞いて、常に広い視野をもって考えるべきと感じた。
	A2	・日本人として恥じないように日本医療についてまず理解すべきと感じた。
	A2	・海外の医療について直に聞くことができて、新しく知ることが多く、勉強になった。
平成16年度	A1	・3人の違う職種の方の話を聞き、違う視点から小児の看護を捉えることができた。
	A1	・小さな命を看守り、一人の人間として尊重し、親子の関係を育む看護について学ぶことができた。
	A2	・これからの実習や親になったとき、役に立つ内容と思った。
	A2	・自宅出産やNICUについては授業ではないのですごく興味深く聞いた。
	B	・保健師の仕事について何も知らなかったが、今回の講演を聞き、地域住民の健康を支える保健師の仕事に興味があった。
	B	・専門分野を学んでいくうえでとても勉強になった。将来にむけて視野が広がった。
	B	・保健師、助産師さんの話を聞き、今後の進路に大いに役にたった。
B	・内容が進学希望の人や母性実習を終えた看護3年にとってとてもいいものだった。	
C	・子供についていろいろな視点から見ることができた。多くの職種が連携して生命を見守り育てていくんだと感じた。	
平成17年度	A1	・講演を聴き、改めて看護について考えるようになった。患者、家族の方の心に寄り添うことのできる看護師になりたい。先生方のような看護師になりたいと感じた。
	A2	・4月から看護を学んできたが、今までは教科書などの紙のうえのことだったのでなんか実感がなかった。話を聞いて、患者、家族の話がリアルに聞けて刺激になった。もっと知識をつけてケアをしたいと思った。
	A2	・現場の雰囲気知らない私にとって先生方が話してくださる事例は驚きだった。今後の実習や学習に役に立つと思った。
	A2	・これから看護の道へと進んでいくという自覚を感じた。決意を新たにがんばりたい。
	A2	・緩和ケアの実際のことに触れられ、看護の力を見直し、がんばりたいと思った。
	A2	・自分らしく生きたい患者さんの気持ちがいっそう勉強できた。

A1:看護の深まり A2:学習への動機付け B:進路 C:他職種

**The Nursing College Seminar planned by Students Themselves  
- From 1995 to 2005 -**

Sachiko SHIRAGAMI, Kazuko UYAMA, Hiromi OKA

Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

In the Department of Nursing, Niimi College, a special seminar is planned and carried out by students themselves. Students determine subjects of the lecture and/or symposium according to their own interests in the fields of nursing. The seminar started in 1995 in order to encourage students in their study. The seminar is helpful for students to get motivation to study, to acquire knowledge about the essence of nursing and to make decision on the course to take after graduation. Because the seminar is planned and carried out by the students themselves, they need to cooperate with each other and to confer with speakers about the subjects, and they acquire sociality in the general public. The students also cooperate with nurses who work in local hospitals. The seminar acts as a study occasion for nurses in the local hospitals.

Key words: Nursing College Seminar, Independence, View of Nursing